陰陽道の反閉と戒壇結界

――戒灌頂流の思想を見る――

野本覚成

日本の大乗戒壇は、伝教大師の悲願であり、弘仁十三年（八二二）五十六歳の入滅七日後に勅許あって、最初の大乗戒が公認された。それから四百数十年後の鎌倉中期に至ると、比叡山はそのころ盛んであった恵檀両流口伝法門の影響により、全くといえるほど授戒会は重視されていない。その理由は、一心三観の深旨を得れば開悟のための戒は無用となる、と言う理念によるものらしい。僧侶資格公認の受戒は機能しなくなったようだ。

だが、檀那流の口伝をつたえる重授戒灌頂の流派は、伝教大師の理念は顕密戒一致にあるとし、特に大乗戒復興を中心に教学の興隆につとめた。ただ大乗戒の復興のみならず、顕密戒一致の理念の下に、論義・口伝・密教・記家・仏教以外の学などの諸学をまなぶことに努力した。口伝法門が深奥秘旨を選択し、純粋に頓直の法門をもとめたのに対し、戒灌頂の諸師〔恵尋・（?～一二八九）[1]・恵顕・興円（一二六三～一三一七）・恵鎮（一二八一～一三五六）・光宗（一二七六～一三五〇）・惟賢（一二八九～一三七八）〕とくに興円は、その基本を伝教大師最澄の教学を、具体的に維持しようと努力した。そのため選択した教学でなく、あらゆる法門を総合し充実した口伝法門を目的とし、その伝授儀式も顕・密・戒一致した独自な重戒灌頂という授円戒（戒）・授口伝（顕）・授灌頂（密）儀式を工夫した。

この諸学の総合網羅の思想は、多くの大乗戒の著書とは別に、恵鎮は『宗要白光』九巻を残し南禅寺に修禅しているし、特に弟子光宗が『渓嵐拾葉集』三百巻を編纂したことにその傾向が顕著である。惟賢は、多くの密教典籍を研究した形跡が鎌倉宝戒寺の自筆蔵書に見られる。特に、戒灌頂の基礎を創り上げた興円は、日本の陰陽道の反閉作法を、戒壇の結界作法に取り入れ、「戒家次第」としているなどは、これも特に顕著な例として挙げられよう。

一

興円は、二種の著作のなかで戒壇結界について述べている。

謹案我山建立結界。雖七重結界除官省符結界。就内地清浄結界有六重。亦名六即結界。山家御釈云。……心性中台常寂光土者。六即結界中央所築戒壇院是也。……六即結界之次第。亦合真言行法之次第。此戒法真言一致故也。四至結界等委尋日記家可聞。是則彼家一箇大事。不可輒爾云云。……（山王を戒壇に勧請して）是則四土不二即離双照結界也。……以如此不思議祕述。結界所築壇所建立本尊故。登壇受戒人必決定成仏也。……

『戒壇院本尊印相鈔』（興円一三〇八年撰）写本

この中で結界の重要性に触れながら、六即結界は「四至の結界等は委しくは日記家を尋ね聞く可し」と言っている。日記家とは後述するように、その大家である義源（一一二八九～一三五一）のことである。また、別に結界について陰陽道の反閉（ヘンバイ）について言及している。

七、安鎮祕口決境領知

……

一　天台結界事

師示云。結界法者。大旨安鎮法大事也。……亦名浄土変印明。故用結界法也。如来所踏足光七日間不消。……此事以故経事相行也。……

一　反閉事

示云。先坐左足踵我後門当。右足踵左足アナウラ中心当。然後立反閉踏始也。凡反閉相貌。皆是千輻輪印也。此印アナウラノ千輻輪文是也。此印足結印也。凡反閉間。前足中心向後足踵踏也。此間ボッケン明誦也。云云。最祕最祕……

已上安鎮結界大事也

『十六帖口決』（興円一三〇六年口決）写本

とあり、明らかに反閉を結界作法の中に取り入れている。反閉とは何を指すのか。

二

弟子惟賢が『結界法則口伝』（来迎寺蔵写本）のなかで、観応二年（一三五一）七月十七日夜、京都元応寺の「戒門正結界」として行っているものがある。本書は略儀のみであるが、その式次第は①顕宗次第、②秘密次第、③戒家次第の三の主要部分から成っている。これは、非常に独自な作法である（他に知れず、現在は行われない）。

①顕宗次第は六即重々結界であり、②秘密次第は密教の安鎮家国法（密教の結界作法）または結界印信を用い、③戒家次第には「九星反閉等有之」としている。この①顕宗次第は『大結界式』（『伝教大師全集』五。山家要略記第二浄刹結界章は偽名、観応二年七月二十三日惟賢写、宝戒寺蔵一軸）のことであり、

その巻尾に「去十七日元応寺結界有之。印共之了」とあって明らかである。この書は、『都法灌頂秘録』（慈覚大師偽撰、日蔵天台密教1）の内容が見られ、『山家最略記』（仏全一二〇）・『九院仏閣鈔』（九巻本『山家要略記』にはない部分）の内容も使用されている。②は安鎮家国法であるが、元来この本作法にも陰陽道らしき影響が認められる。③戒家次第の反閉については、『結界道場図』なる写本（来迎寺蔵）がある。この書は、義源が神蔵寺長老（興円のこと）に反閉の事と際分の事の二条を進上（正和元年（一三一二）十月）したものが写されており、興円は義源からこの作法を伝授したことが解る。この中に二種の反閉の図があるが同一ではない。足で踏む作法は、興円が前の「天台結界事」で述べているが、陰陽道の文献ではどうか。ほぼ同時代の日本文献『小反閉作法幷護身法』（村山修一編「陰陽道基礎史料集成」東京美術昭和六二年刊）に見る、四縦五横呪幷印および禹歩（ウフ）とも異なり、すでに種々の反閉と禹歩の作法[2]が存在したことが知れる。

戒灌頂が用いる重書『頓超秘密綱要』であれ、『大結界式』『都法灌頂秘録』『山家要略記』『山家最略記』『結界道場図』であれ、すべて記家の義源を経て伝えられたもので、これに興円が種々に微細な教学内容も感り込んで、大系的な独自の大乗戒壇の結界作法を造り上げたと考えられる。義源の影響は置くとしても、興円の大乗戒・天台教学・仏教興隆に注ぐ熱意は相当なものがあり、極めて古い呪術方法[3]を積極的に導入し、その理念を具体化している。重授戒灌頂の授戒法は、このような融合思想が根底にあって完成し、五代国師恵鎮・光宗・惟賢がより具体化していったものと思われる。

1　『三通口決』写本中（『続天台宗全書』円戒1を参照）に、「上人正応二年迎臨之期」とあって、没年が知れる。

2　反閉と禹歩（三歩九跡）が仏教の儀式に正式に取り入れられた具体的な珍しい例と、思われる。陰陽道との関係を考慮する上で、重要であろう。反閉と禹歩は元来別のものという。禹歩に関する研究論文は。藤野岩友著『中国の文学と礼俗』の「禹歩考」（角川書店、昭和五十一年）。高瀬重雄稿「青木北海とその『禹歩遷決』」（『東方宗教』三九号―昭和四七年）があるが、多くない。

3　最古の禹歩の例は、紀元前二五六年『雲夢睡虎地秦墓竹簡』「日書」（一三九、一五二）に「禹歩三」（文物出版社、一九八一）が見られ、『馬王堆漢墓帛書』肆「五十二病方」にも見られる。歩行法は『抱朴子』登渉・雑応・仙薬が最古で、『金鎖流珠引』には踏斗とともに図解される。これらは麦谷邦夫先生（京大人文研助教授）にご教授頂いた。厚く御礼申し上げる。

＊引用の写本は、『続天台宗全書』円戒1重授戒灌頂典籍、を参照されたい。入手困難な貴重書が収録できた。

〈キーワード〉　陰陽道、反閉禹歩、戒壇結界法、戒灌頂、顕密戒一致

（天台宗典編纂所編輯長）